

209 発がんを含めた炎症性腸疾患病態におけるplasmin	Heissig Beate
--------------------------------	---------------

【目的】 炎症性腸疾患（IBD）は潰瘍性大腸炎やクローン病等によって構成される慢性炎症性疾患である。近年、慢性炎症は発癌要因の一つと考えられており、IBDは、結腸直腸癌（CRC）の前癌病変と捉えられている。

【方法】 本研究では、アゾキシメタン/デキストラン硫酸ナトリウム誘発・発癌モデルとヒト検体を使用し、IBD・慢性炎症を基礎とした発癌における線溶系因子の役割を精査・検討した。

【結果】 CRCの疾患モデルとヒト検体の病変組織中で、有意に高い組織型プラスミノゲンアクチベーター（tPA）の発現が検出された。さらにCRCの疾患モデルにおける線溶系因子 tPA およびプラスミンの前駆体であるプラスミノゲンの遺伝子欠損、またはプラスミンの薬剤による活性阻害は、発癌、及び癌増殖の進行を抑制することが判明した。私共のデータは、プラスミンに対する分子標的療法、プラスミンの活性阻害が、IBDの発癌予防に有用である可能性を示唆するものと考えている。

ヒト結腸癌の組織アレイとヒト腫瘍（右）及び非腫瘍部（左）組織のtPAによる免疫染色切片

